



285号

2023/7

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



ギャロンの山村で丸木橋を渡る少女：カメラを一瞥する笑顔が印象的でした。4月号の表紙を飾った、女優になった尼瑪頌宋(ニマソンソン)です。後方に見える石積みの塔はギャロンに多く有ります。宮崎駿「ラピュタ」のヒロイン、シータの故郷の風景に登場する塔は「ジョージア(旧グルジア)共和国の"Ushguli Tower"のようです。

(四川省小金県撮影：姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三)

'わんりい' 2023年7月号の目次は18ページにあります

今月の言葉は、日本語でもそのまま「不毛の地」と言いますが、四字成語から出た言葉との認識は薄いようです。広辞苑にも、「不毛＝植物が育たない、収穫がないこと」と載っていますが、「不毛の地」は載っていません。言葉として載っていなくても、充分意味が通じるからでしょう。

・>・>・>・>・>・>

紀元前 594 年、楚の荘王は軍隊を率いて鄭国を攻撃しました。鄭国は打ち負かされ、鄭の襄王は万策尽き果て、もろ肌を脱ぎ、左手に白旗を掲げて、荘王の前に跪き和を乞い、鄭の国土を楚王に献上しました。その上で、鄭の襄王は楚の荘王に言いました：「王様が、亡国の民である私と私の部下を哀れと思し召すなら、国土の一部、草一本生えないこの荒れ地を、私の部下たちが身を寄せる場所としてお与えください。もしお与えいただければ、心より感謝申し上げ、何なりとご命令の通りに致します」

楚の荘王は、襄王が部下の為を思って屈辱的な申し出をするのに感激して、彼らを放免してやるのでした。

・>・>・>・>・>・>

言葉の意味：植物が育たず、生活をするのが難しい土地。荒涼として、やせた土地。

使い方：この地は、もともと不毛な土地だったが、人々の粒粒辛苦の結果、今では豊かな耕地となり、毎年大きな実りをもたらしている。

・>・>・>・>・>・>

日本では四字成語としての認識が薄いようですが、中国では「史記一鄭世家」に出てくる立派な「四字成語」です。



挿絵：満柏画伯

鄭は、周王室から出た、古くからの歴史がある国ですが、春秋時代には、南の楚と北の晋に挟まれ、時に応じて晋に付いたり楚に付いたりして辛うじて生き延びる小国に成り下がってしまいました。

北の晋を打って天下に覇を唱えたい楚の荘王は、両国の間で双方に面従腹背する鄭の振る舞いを疎ましく思い、鄭を滅ぼそうと兵を動かしました。鄭は晋に援軍を要請しましたが、晋は鄭が直ぐに負けるだろうと考えて援軍の発進を控えていました。鄭は死に物狂いで戦ったので、その様子を見て晋も援軍を送ることにしました。しかし、晋の援軍が到着する前に鄭は破れ、このお話のような結末を迎えたのでした。

この時、晋も楚もそれぞれを相手に戦うつもりはなかったのですが、

出兵した晋の将軍が上層部の意向を無視して楚を攻撃したため、楚もやむを得ず受けて立ち、ここに春秋時代の二雄、晋と楚が戦うことになったのだと史記は述べています。この戦いを「ひつ邲の戦い」と言い、この戦いに勝利した楚の荘王は諸国を纏める実力のある覇者と認められ、後世「春秋五覇」の一人と目されるようになったのでした。

因みに、ここに登場する楚の荘王は、以前ご紹介した四字成語「一鸣惊人＝（三年）鳴かず飛ばず」の主人公でもあります。もっとも当時（2017年7月号）のわんりいでは、齊威王のこととして紹介しました。会員の方のご指摘を受けて調べましたら、何と！「史記」ではこの同じ「一鸣惊人」という話を、楚荘王と齊威王両方の話として紹介していることが判明しました。齊の威王は、楚の荘王より 250 年程後に活躍する名君です。

岑参の辺塞詩

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

岑参(715~770)は盛唐を代表する詩人の一人です。特に三歳年上の杜甫とは生涯を通じて公私にわたり親密な関係にありました。辺塞詩を得意とし、詩風としては地味ながら、実体験に基づく独自の境地を切り開いた詩人としても知られています。

作者岑参は江陵の人。天宝3年(744)30歳で進士に及第後、約10年にわたって辺境の地を転々とした経歴の持ち主です。この作品は安西節度使高仙芝の幕僚として遠く都を離れて任地安西(今の新疆ウイグル自治区クチャ市付近)に赴く途中、偶然都長安へ旅立つ使者と出逢った時のものです。

逢入京使

岑参

gù yuán dōng wàng lù màn màn
故園東望路漫漫
shuāng xiù lóng zhōng lèi bú gān
双袖龍鍾泪不干
mǎ shàng xiāng féng wú zhǐ bǐ
馬上相逢無紙筆
píng jūn chuán yǔ bào píng ān
凭君传语报平安

- * 逢入京使=西域より都長安に赴く使者に出会う。
- * 漫漫=遠く遙かなさま。mǎn mǎnと読むこともある。押韻法としては寧ろこちらの方が適切。
- * 故園=故郷。ここでは都長安の住居を指す。
- * 双袖=着物の両袖。
- * 龍鍾=涙に濡れるさま。
- * 紙筆=紙と筆。筆記用具。
- * 凭君=君に頼む。
- * 传语=言葉を伝える。言伝る。
- * 平安=無事であること。

[訓読]

京に入る使に逢う

岑参

故園東に望めば路漫漫

双袖龍鍾として涙乾かず

馬上に相逢うて紙筆無し

君に憑り伝語して平安を報ぜん

これまで辿って来た道を遙か東に向かって振り返れば、茫洋として果てしない。残した家族のことを思うと、涙が止めどなく溢れてくる。幸いにして都に帰る君と馬上で出逢うことが出来たが、急なことゆえ便りを託そうにも紙も筆もない、せめて無事であることだけでも君の口から伝えて欲しい。

戦場に赴く文人官僚の一見何気ない日常の一コマですが、その何気なさの裏に、時代の厳しさをそこはかたく感じさせます。これがこの作者の真骨頂でしょうか。

[和訳]

来し方見れば路遙か

涙にくれて故園を思う

馬上のこととて手紙ままならず

ただ「無事なり」と伝えて欲しい



岑参像と岑参記念館(湖北省荆州市) 百度百科から

朱仙鎮木版年画

文と写真＝村上直樹

中国では6月7日から10日にかけて大学入試全国統一試験（高考）が実施された。地域（省・直轄市・自治区）によって入試制度が異なり試験日も多少違う。河南省では7日と8日の2日間である。科挙制度の伝統を受け継ぐ中国における学歴重視と受験競争の過熱ぶりにはよく知られている。この期間は前後を含めてメディア、SNS等を問わず関連した話題で持ち切りであった。河南省鄭州市では乗降口を中国大学界の最高峰である清華大学と北京大学の校門風にあしらった路線バスが走っていたそうである。一方、山東省済南市のある試験会場では^{あらて}新手のカンニングを防止するためドローンを撃墜できる特殊な銃を構えた警備員が配置された。

そのような中「高考後准考証別乱扔！」（大学入試が終わっても受験票を捨てないで！）という見出しが目を引いた（『大河報』電子版2023年6月10日）。その後の手続きに必要なからなのではなく「河南多家景区：高考学子免票、半价」（河南の多くの景勝地：大学受験生は無料や半額）と続く。これまで必死に頑張ってきた受験生に束の間の息抜きを、という計らいであろう。

私が行ったことのあるところでは、たとえば、鄭州市の「康百万庄园景区」は6月9日から9月28日まで高校・大学の受験票または合格通知書を持っていれば無料、同伴の親・友人は20%引きである。因みに通常の一般入園料は80元（1元=19.5円換算で1,600円ほど）である（ただし、いずれの施設ももともと学生・高齢者等を対象とした各種割引制度がある）。

開封市の「開封清明上河園」も夜間入園が無料になる（通常100元）等の内容で参加しているが、こちらは実施期間が6月9日から6月21日までとかなり短い。同じく開封市の「万歳山大宋武侠城」にも私は何回か行って思い出があるが、ここは同伴の親も半額になる（通常60元）。

この活動には2016年10月に開園した「朱仙鎮啓封故園」も参加している。ここは総面積約5,300畝（3.53平方キロメートル、上野公園の6.6倍）という広大な敷地に水上観光、娯楽、ショッピング、宿泊を通じて中原の「江南水郷」を体験できる総合レジャー施設で、その開設理念は「外在古典、内在時尚、古韻濃厚、風格独特」（外見は古典的、中身は流行りに乗っていて、古き時代

の趣が濃厚で、風格は独特）とある。

私はこの施設に実際行ったことはないが所在地の朱仙鎮ならかなり以前の2008年3月15日に一度訪れた。当地の岳飛廟、そこで偶然、呉雪莉女史を見かけたことはこの「雑感」でも触れた（2020年12月号と2022年9月号）。朱仙鎮は開封市の中心部から西南へ22.5キロメートルほどに位置している。明清時代には淮河水系の賈魯河が整備されたのに伴い水運物流の拠点として発展し、広東・仏山鎮、江西・景德鎮、湖北・漢口鎮とともに「四大名鎮」と称されていた（現在、行政的には開封市祥符区に属する）。

朱仙鎮と言えば木版年画の故郷として有名である。年画は吉祥やおめでたい雰囲気を表し、もともと春節に飾るものである。中国の伝統的な木版印刷の方法（顔料を水で溶き、油性のものを用いない）で作成する。絵の題材としては歴史劇、演義小説、神話、民間伝説から採られるのが一般的である。中国四大木版年画（天津・楊柳青、江蘇・^{とうかお}桃花塢、山東・^{いぼう}濰坊楊家埠、四川・綿竹）には含まれていないものの朱仙鎮木版年画は2006年5月20日に公表された「第一批國家級非物質文化遺產」（第一次國家級無形文化遺產）では民間美術部門51件の一つに選ばれている。

現地では運河沿いに作業場と販売店が並んでいた。作業場はどれも小規模で最大でも4人とのことであった。いくつかの店で年画を買い求め、作業場も見学して版画印刷の体験もさせてもらった。写真は代表的な老舗「曹家老店」である。

この時入手した1枚に「満載而帰」と題する年画があ



朱仙鎮にて筆者撮影（2008年3月）



朱仙鎮で入手した木版年画



開封市「書店街」にて筆者撮影(2008年10月)

る(写真左)。これは五代十国時代の名君で後周を強大にした柴榮が不遇な時代に手押し車に傘を積んで生計を立てていたという逸話から、その歴史的功績を讃えるため金銀財宝を満載したこのような絵になった。

朱仙鎮の年画は版画芸術の発展にも尽力した魯迅も「朱仙鎮年画朴实、不塗脂粉、人物没有媚態、色彩濃重、很有郷土味、具有北方木刻年画的独有特色。」(朱仙鎮の年画は朴实で、ごてごてしておらず、人物はとってつけたようではなく、色彩濃厚で、とても郷土色があって、北方木刻年画ならではの特色を有している)と高く評価していた。現代では新しい題材も採られるようになっており、写真右は2008年の北京オリンピックに因んで開催された書画展において特別金賞を受賞した曹新年・万秀華夫妻の作品である。

私はその後、同じ2008年の10月11日に開封市旧市街地の「書店街」で偶然「開封朱仙鎮年画美術館」という看板の掛かった建物を見つけた(写真参照)。3月に朱仙鎮の現地に行くことがなければおそらく気にも留めず通り過ぎていたと思う。早速、入ってみるとやや雑然と年画・製作道具・資料等が並んでいた(入館は無料)。日本から来たと言うと専門家と誤解されたのか(?)創設者で館長の任鶴林氏自ら解説してくださり、年画・記念品・資料等をもらった上、ここでも製作体験をさせていただいた。任氏は日本の浮世絵に関心があったので帰国後浮世絵の画集をお礼にお送りした。

この時もらった資料に日刊新聞『大河報』の「厚重河南」面で2008年1月に連載された「開封朱仙鎮年画前世今生系列之1~6」があった。それによると朱仙鎮年画はその題材を理由に文化大革命期には封建時代を肯定する「旧年画」として批判されその伝承も途絶えそうになるが、改革開放期に入ってその復活継承に多大な

貢献をしたのが任鶴林氏である。

この連載の最終回は「是開封年画、還是朱仙鎮年画?」として木版年画の産地が開封と朱仙鎮の間を、両地域の盛衰に伴って行き来した歴史的経緯が語られている。では中国・木版年画の起源は一体どちらにあると考えるべきか、論争が続いているようだ。

北宋の首都開封(東京開封府)の様子を記述した孟元老『東京夢華録』の第10章の「十二月」に「近歳節、市井皆印売門神、鐘馗、桃板、桃符…」(新年が近づくくと街中では至る所で門神、鐘馗の図柄を印刷して売り出したり、桃板・桃符を取り付けたり…)というくだりがあり、これが年画などを指す。なお、鐘馗は道教系の神であり古代の伝説にもとづき魔除けを意味する。また、桃板・桃符は桃の木のできた板に文字を書いたもので古代よりやはり魔除けとして門に取り付ける。一方、張枋端作『清明上河図』にも「王家紙馬」店という看板が見えるが、この紙馬が年画の当時の呼び名である。こうした証拠から木版年画が北宋の開封に存在したことは間違いないとされている。

やがて開封が金に占領されたため木版年画の職人が朱仙鎮に逃れ、そこから全国に木版年画が広まったのだから実質的な起源は朱仙鎮にあるというのが朱仙鎮派の意見である。ただし、最近のネット情報によると任鶴林氏はそうした説明に懐疑的である(『木版年画』2019年12月2日)。開封からわずか22.5キロメートルしか離れていない朱仙鎮に金朝が自ら滅ぼした北宋の伝統をあえて安住させておくであろうか。開封から朱仙鎮への伝播はかなり後のはずというのが任氏の考えのようである。

中国の面白い神話物語・伝奇物語(24) — 虬髯客伝(2)

きゅうぜんかくでん

顧傑

皆様、お久しぶりです。

今回は前回の続き、虬髯客（髭の男）、李靖と紅拂女の物語をお伝えいたしましょう。

~~~~~

三人はそれぞれ予定通りに太原に入り、約束の日に、約束の場所で再開を果たした。

李靖と髭の男と一緒に、李世民と親しいという劉文静という人を訪ねて、李世民に会いたいと願い出た。劉文静には、

「人相見の上手な人が、李世民に会いたいと言っている。ここに連れて来ていただくことは出来ないだろうか」

と嘘をついた。劉文静は、人相見の得意な客がいると聞かすや否や、すぐさま使用人に李世民を迎えに行かせた。使いは、李世民を連れて戻って来た。みすばらしい毛皮を纏っているが、顔が

光り輝き、その所作は一般人とは異なっている。髭の男は李世民を見て心から感服し、一言も言わず、末席に座った。数杯の酒を飲んだあと、李靖に声をひそめて言った。

「彼は、本当に神の子だ！」

李靖は、この髭の男の言葉を劉文静に伝えると、劉文静はさらに嬉しそうになり、我が意を得たりとばかり頷くのだった。

劉文静の家を出てから、髭の男は李靖に彼の気持ちを説明した。

「李世民が神の子であるということは十中八九間違いないと思うが、念のため兄に確かめて貰おうと思う。あなたは紅拂女と一緒に宿に戻っててください。正午に、旅館の東にある料理屋に来てください。下にこのロバともう一頭ロバがいるはずだ。私と

兄は料理屋の二階にいるので来てください」

言い終わると、また別れを告げて去っていった。

約束の日に訪れてみると、髭の男と旅姿の男が二階にいるのが見えた。衣服を整えて二階に上がると、髭の男が道士と飲んでいて。盃を十数回交わした後、髭の男は「下の戸棚に10万の金がある。紅拂女に言っ、秘密の場所に隠しておいてください。いつかまた汾陽橋で会おう」と言い残し、道士と共に去って行った。

李靖が約束の日に汾陽橋につくと、道士と髭の男はすでに到着していた。三人揃って劉文静を訪ねた。その時劉文静は将棋を指していたが、三人の来訪を知ると、劉文静は急いで手紙を書き、李世民に対局を見に来るようにと誘いの使いを送った。道士と劉文静が対局し、髭の男と李靖が観戦した。ほどなくして、李世民がやって来た。彼の表情は明るく、丁寧

に挨拶をすると、その場の雰囲気は賑やかになった。李世民は李文静に替わって道士と対局した。道士は李世民と何回かの対局を終えたが、最後には悲しみの表情を浮かべ、感に堪えないように叫んだ。

「このゲームはすべて終わった！ もうすべては終わったのだ！ 救う術はない！ 逃げ道もない！」と言って、駒を投げ捨てて出て行った。

道士は追ってきた髭の男に、

「この世界はあなたの世界ではありません、他のところなら大丈夫でしょうが…。別の世界で努力しましょう」と言った。

その後で、髭の男は李靖との別れ際に、

「都にいきなさい。到着した翌日、ある小路の小屋へ、私に会いに来てください。あなたと紅拂女は結婚しているが、貧しくて何も持っていないでしょう。私



紀元前2世紀頃の朝鮮半島(Wikipedia)



は少々金の用意があるので、受け取って欲しい」と言った。

李靖は言われたとおりに都へ行き、髭の男の住まいを探し歩き、中心を外れた小路に髭の男の家を遂に見つけた。

扉を叩くと使用人が出て来て、

「主人が李様と奥様をずっとお待ちしておりました」と言った。

内に入ると、外見からは想像が出来ないほど立派な建物が現れた。40人の女の召使いと20人の男の使用人が庭に並んであいさつをする。使用人の一人が、李靖を東の広間に案内したが、そこには極めて貴重で珍しい品々を詰めた幾つもの箱が部屋いっぱい置かれていた。ふたを開けた箱には衣装や装飾品がたくさんあり、皆珍しいものばかりだ。自由に選んで着替えるようにと言われ、高価な衣装と珍しい装飾品を選んで身に着けると、召使が「主人が来た」と知らせを寄越した。

髭の男は、紗の帽子に毛皮のコートを着て、龍と虎を率いているようなオーラを放ち、堂々と入って来た。李靖夫婦を見ると、大いに喜んだ。髭の男が振り向いて促すと、天女のように美しい女性が現れ、一礼した。髭の男の妻だ。

そこで、二人は中殿に通され、素晴らしいもてなしを受けた。並べられた料理は、王侯貴族の家でもかなわないほどの豪華なものだった。4人が着席すると、また20人の踊り手と歌い手が呼び出され、彼らの前で、天から降ってきたような、この世のものとも思えない美しい音楽を奏で、舞い踊るのだった。

食事が終わると、また酒を酌み交わした。少し飲んだ後、召使たちが東のホールから、刺繍のハンカチで覆われた20個の手箱を運んできた。一列に並

べて中身を取り出した中に一冊の兵法書が含まれていた。

髭の男はその書物の表紙を指でなぞりながら、語り始めた。

「私が持っているもの、すべてあなたに差し上げよう。なぜかと訊かれるのか？この世での成功を求めて、私は二十、三十年と努力し兵力も準備して来た。しかしこの世に王となるべき人が現れた今、私はここにいる意味がなくなっている。太原の李世民こそ本当の賢王だ！三年か五年のうちに、平和の世がやって来るだろう。李靖、あなたは天賦の才能を持っている。平和になった時、賢王に協力し、尽力し、国のために一身をささげ、いずれは最高官位に就くだろう。天上の美貌と秘めたる異能を持つ紅拂女は、あなたと共に、栄光と繁栄の人生を謳歌することができるだろう。紅拂女でなければ、李靖の評価を高めることはできないし、李靖でなければ、紅拂女に栄光と繁栄を享受させることはできない。皇帝が立ち上がる時、それを補佐する誠実な人が、まるで約束したかのように必ず現れるのは、決して偶然ではないのだ。それは王者としての虎の叫びが風を巻き上げ、竜の咆哮が雲を切り裂き、世の中の有能な人士を呼び集めるのだ。私の贈り物を受け取り、真の神の子を補佐し、彼が成功を収めるのを助け、力を尽くしなさい！

この後さらに10年経ち、千里の外、東南の方角で何か異常なことが起きた時、その時こそ私が自分の望みを実現させたことの証なのだ。その時は、あなた達二人して東南の地に向かって酒を注ぎ、私の成功を祝って欲しい」

言い終わると、家にいる使用人たちに、

「これからは、李靖と紅拂女がお前たちの主人になる。私の時と同じように誠実に仕えるように」との言葉を残し、夫妻は、奴隷を数人連れてだけで、馬に乗り走り去った。一行の姿は、直ぐに見えなくなった。

李靖は、髭の男の財産を引継ぎ、李世民の事業のために資金を提供し、実務的な協力をしたので、世の中は、李世民の下、平和に治まり、繁栄を楽しむようになった。

貞観十年（李世民の統治から10年）、李靖は左仆



百度百科(虬髯客伝)より



劉国輝絵 風塵三俠図(中国收藏網より)



冯骥才絵(搜狐より)

射平章事（宰相のような職）に任命された。

ある日、「千隻の船と十万人の兵士が扶余の国に入り、王を殺して自分たちの首領を新しい王にした。今、元々の国は滅ぼされた」と知らせる伝令が都に着いた。李靖はすぐに髭の男であると気づき、志を実現できたと心の中で喜んだ。家に帰ると、妻にこのことを伝え、二人で新しい服に着替えて、東南の方へひれ伏して祈り、地面に酒を注いで、髭の男の成功を祝った。

天が定めた真の神の子の出現は、自ら偉業を成し遂げようとする英雄とは相いれないものなのだろう。だからこそ髭の男は、天下の安定のため、李世民と抗争する道をあきらめ、去っていったのだ。

後世では、「衛国公李靖の兵法の半分は、髭の男に教わったものだ」と言っている。

~~~~~

髭の男の物語はこれで終わりです。いかがでしょうか？

少し分かりにくかったかもしれませんので、少し

ご説明をさせて頂こうと思います。

武力を持ち、軍法を熟知している髭の男は、間違いなく英雄でしょう。

世の中に、次の皇帝として李世民の名前が知られるようになっていたので、ライバルの様子を確認したいと思い、李靖に、李世民との面会の仲立ち頼んだのです。

髭の男は、李世民と会って、その容貌に天子の相を見て取りましたが、念には念を入れ、知人の道士に頼んで再確認をしました。

しかし、道士もまた、天命に抗うべきではないと気づき、その旨を告げて去って行ったのです。

髭の男は、もし天下を取ろうとすると必ず李世民に戦争を仕掛けなければならないことが分かっていました。最終的には李世民が勝つとしても、決着がつくまで、国民に多大な災難をもたらすであろうことも悟っていました。

そのため、軍略の書と財宝を李靖に残して去って行きました。

そして最後に、李世民が唐朝を開き、天下泰平になった10年後、髭の男もまた他国で建国という偉業を成し遂げました。

ちなみに、髭の男が討伐した扶余の国は、高句麗と同じくツングース系貊人（はくじん）が、前2世紀ごろ中国東北部の松花江中流に建国したもので、1～3世紀ごろには鮮卑および高句麗に対抗する勢力となっていました。494年に同じツングース系の勿吉（モッキツ）に滅ぼされました（勿吉は6世紀半ばに高句麗によって滅ぼされます）。百済はその扶余の後裔と称しており、最後の都の名も扶余としていました。

つまり、扶余は、唐朝建国時の遙か昔に滅亡しているのですが、髭の男が王となった東南の国として登場してきます。これもまた、小説作品のご愛嬌と言えますが、実在した国名が、時代を超えて出てくると、読者は史実ではないかと、大いに惑わされますね。

「秦皇島」から「承德」へ

「避暑山莊・外八廟」駆け足旅行(4)

文と写真 吉光 清

「碑亭」内に屹立する3つの石碑の大きさに圧倒されながらも、先を急いだが「百度百科」によると、「龍の紋様に縁取られた中央の石碑は、『普陀宗乘之廟』の由来について記しており、乾隆三十六年、生母である『孝聖皇太后』の80歳を寿ぐため、乾隆帝が『南海普陀寺』の様式ではなく、チベット様式の仏教寺院に倣って創建した。碑文の最後には、『吾聞瞻部洲，古德有道場』と詠んだ詩一首が添えられている。また、“両側に建つ四角い柱のような2つの碑は、中国及び清朝への『全トルグート族帰順記』と『トルグート族民衆救済記』であり、同一の内容が、柱のそれぞれの面に満州語、漢語、モンゴル語、チベット語で記されている。漢文の文字は乾隆帝の宸筆である”と記されている。

4種類の言語の対訳が有るのは、エジプトのロゼッタストーンのようだ、と思った。

■「案内盤」の解説と伽藍配置

「碑亭」を通り抜けた先には石畳が続くが、道脇に説明盤が置かれ(右の写真に位置を表示)、「普陀宗乘之廟」の解説と境内の伽藍配置が示されていた。左半分には漢文の解説文が記され、その下に英文が記されていた。漢文の8行が英文では20行になっていて、その量的な対比が面白かった。

解説文に曰く、“1767年から1771年までの4年間を掛けて完成した。『小ポタラ宮』とも称される。清の乾隆帝が自身の60歳、生母の皇太后の80歳を祝賀して創建した。寺の敷地は22万平方メートルでチベット様式の仏教寺院の中で最大である。屋上が平らな「白台」と、屋上に搭が並ぶ「梵搭白台」が山の斜面に散在している。中心は山頂にある『大紅台』で、その台上に建っている『万法帰一殿』が主殿であり、塗金の魚鱗瓦などで飾られた姿・形は高い芸術性を持っている”。

右半分には、等高線まで入れられた、詳しい地形図上に伽藍配置と各建物の名称が記され、同時に拝観

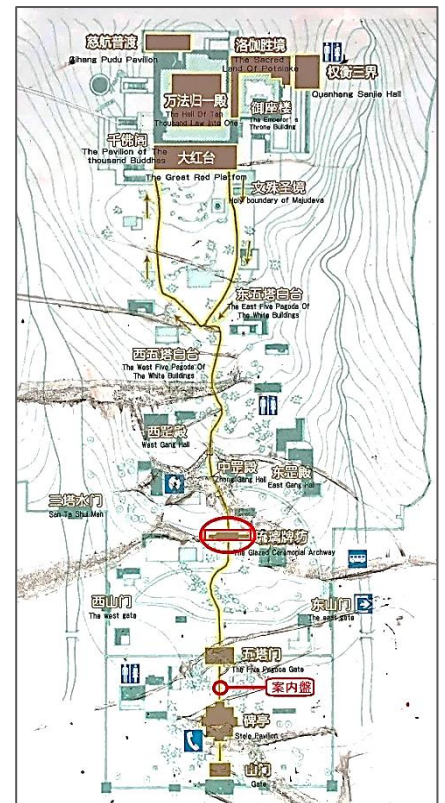
ルートも示されていた。建物群は尾根上に配置され、北に向かうに連れて高度を増し、伽藍全体が聳え立つように設計されている。境内の入口にあたる「山門」～「碑亭」～「五搭門(wǔ dā mén)」の区域では、両側の谷との間に長く連なる境界が造られ、谷側から入って来ることを出来なくしている。

チベット様式の寺院らしい景観のかなりな部分を占めているのは、中腹に建つ「东罡殿」「中罡殿」「西罡殿」や「东五塔白台」「西五塔白台」などの建物群であるが、拝観ルートはそれらの建物内は通らずに、ひたすら「大紅台(dà hóng tái)」に向かっている。

「大紅台」に向かう観光客の混雑緩和のためだろうが、往路と復路が別々に設定されている。

■「五搭門」のユニークな外観

「碑亭」を通り抜けると、前述の案内盤とともに、屋上にそれぞれ異なった色の、先の尖った、ヒョウタンのような搭が5つ並んだ白い建物がすぐ目に入った。これが「五搭門」であることは一目瞭然だった。塔の色は、左から「赤茶色」「灰色」「黄金色」「白色」「暗い青色」に見えた。目を凝らすと形もそれぞれ微妙に異なり、塔の表面には異なる紋様や小窓(?)で立体的な装飾が施されているようだった。(後に、これらの塔は、チベット仏教で“宇宙万物を構成する”



伽藍配置と拝観ルート図



屋上に5種類の塔が並ぶ「五塔門」



装飾性豊かな「琉璃牌坊」

要素と考える「地」「水」「火」「風」「空」を表すものと知った。）

五塔門に至る広場までは広い石畳が敷かれ、周辺は芝生のような短い下草、広葉樹の間隔はゆったりしていて、空が広く開けて、都心にある大きな庭園のような雰囲気だった。

建物正面の石造りの階段を登ると、左右に狛犬のように「象」の大きな石像が鎮座していた。その周囲は頑丈な金属の柵で囲まれていた。

「山門」を入ってから初めて出会った、チベット様式の寺院建築物であったが、アーチ型をした3つの出入口が並ぶ形式は、中国各地の遺跡でもお目に掛かっていたものなので、チベット様式と伝統的な中国様式の折衷ではないかと思った。

いずれにしても、日本の寺院の建築物とは凡そ雰囲気が異なり、明るくカラフルで、形もユニークな建造物に出会って面白く感じた。

■「琉璃牌坊」の前に立って

「五塔門」を抜けて、緩やかな傾斜をしばらく登ってゆくと、いかにも中国的な美しい建造物が現れた。写真に撮った案内図で確かめると「琉璃牌坊 (liú lí pái fāng)」であった。(案内図上に円で囲った建物)

此の建物の手前までは、左右の谷からも「东山門」または「西山門」を通れば入って来ることが出来るようであった。しかし、境内を奥へ進むためには、どうしても、此の建物を通過しなければならないようになっているのである。

「牌坊 (pái fāng)」とはウィキペディア等に拠ると、中国の伝統的建築様式による「門」の一つである。そ

の起源は2本の柱の上に1本の梁を渡しただけのもので、その後、より頑丈な石、木、レンガ、瓦などを使い、また組み合わせて造るようになり、柱や梁の本数を多くして（出入口の数を増やし）、その門の内側（里坊）を称える言葉を門に刻み、掲げるようになった。また、屋根や斗拱 (dǒu gǒng : ますぐみ) を取り付け、複雑で優美なものになったという。

世界各地の中華街の入り口に建てられている牌坊は色彩豊かな門として分かり易い形状になっている。新国王が、中国からの「冊封使」を其処まで出迎えたという、首里城の「守礼の門」も「牌坊」である。

此処の境内にある「琉璃牌坊」は、四本柱の3カ所の間を出入り口とする点は「五塔門」と同じ形であるが、出入り口のアーチは白い翡翠で縁どられ、7つの屋根付き牌楼を上に乗せて、装飾的で華麗な建造物である。赤レンガ色の壁、黄色い屋根瓦、柱や前面を飾る緑色のタイルのコントラストが鮮やかである。

前面中央上部に飾られた白い石板の文字は読み取れなかったが、階段手前の左側に説明盤があり（上の写真）、乾隆帝の宸筆による「普門应现」が満州文字とともに刻まれていて（建物の裏側の外観も表側と同一であるが）、裏側の文字は「蓮界庄严」ということであった。併せて、僧侶と祝祭への参加が認められた王侯貴族のみが通過を許され、その他の者は立ち入りを許されなかったと説明されていた。階段の両側には「獅子」が金属製の柵内に鎮座していた。

期待に反して、「碑亭」の屋根上に見た“行列する何か”を「五塔門」と「琉璃牌坊」の屋根に見ることは出来なかった。(つづく)



「台湾糖業博物館」内の胸像
(「鈴木商店記念館」HPより)

倍の33万トンとなり、「台湾製糖」が日本国内に製糖工場を竣工させ、台湾で製造した原料糖を神戸と九州で精製するようになった後の1925年には16倍の48万トンに増大し、台湾の製糖産業は一大発展を遂げたのである。

高雄市にある「台湾糖業博物館」に陳列されている稲造の胸像の説明プレートには「台湾砂糖之父」と記されている。

<女子高等教育への貢献>

稲造は女子高等教育に対しても多大な貢献をしたことを忘れてはならない。

津田梅子が1900年に創立した「女子英学塾(現在の津田塾大学)」の理事を生涯勤めて、1907年の第5回卒業式では、外遊中の塾長・梅子に代わって式辞を英語で述べている。

1918年、稲造はキリスト教の精神を教育の根本方針として設立された「東京女子大学」の初代学長になった。校章に表された二つのS(Service・Sacrifice:奉仕と犠牲)は稲造の発案である。

稲造の後を継いで第二代学長になったのは、安井てつ、である。彼女は英国での官費留学からの帰途、パリに立ち寄り、初対面だった稲造を“スピリチュアル・フレンド”と手紙に記すほどに尊敬し、初代学監として、稲造と共に教育に当たった。戦中の困難な時代の中で17年間も学長を務めた。

札幌市にあった「スミス女学校(現、北星学園女子中学高等学校)」の生徒だった河井道は、後年、上京し、新渡戸夫妻に伴われて渡米、プリンマー大学を卒業して、終生、稲造の崇拜者となった。彼女は1929年に「恵泉女学園」を創立し、女子教育のために一生を捧げた。

<国際連盟での活躍と八方ふさがり>

稲造は、1920年から1926年まで国際連盟事務次長を務めた。演説が苦手だった国際連盟初代事務局長のイギリスのJ・E・ドラモンド卿に代わって、出来て間もない国際連盟の何たるかを各国に説明した。また、キュリー夫人やアインシュタイン

も委員に加わった『知的協力委員会』の創設と活動に大きな貢献をしている。この『知的協力委員会』はユネスコの母胎となったものである。

しかし、1928年6月に張作霖爆殺事件が起こり、1931年9月に柳条湖事件が起きて満州事変となり、日中間の15年戦争が始まった。国際連盟のリットン調査団が1932年2月29日、日本を訪れた。この時は“リットン卿がお見えになるぞ”と言って大変緊張した表情だったという。日本は1932年3月1日に満州国を建国し、宣統帝・愛新覚羅溥儀を満州国皇帝に据えた。5月15日には『五一五事件』が起き、軍部の暴走が始まっていた。

日本が国際的に孤立化し、国内の言論の自由が制限されてゆく厳しい時流の中で、稲造は“自分の出来ることは何か”と問いながら、カーライルの“最も身近な義務を果たせ”という信念で、日米対立を和らげるため、1932年に渡米し、フーバー大統領らを訪問、日本の立場を訴えた。しかし、国内では軍部を非難した稲造を、“鬼畜米英をこらしめようとしている日本の国策に反対する国賊・売国奴・白人追従者だ”と、新聞で叩かれ、国粹主義者からは命を狙われた。

一方で、若き日に留学したアメリカやカナダでも理解されるどころか、“新渡戸は、中国侵略を続ける日本軍部の犬となって、その弁護をするために、わざわざアメリカまでやって来た。自分の保身のためだ”と非難された。彼の真意や行動は誤解されるばかりで、八方ふさがりだった。

<昭和天皇からお召しを受ける>

1933年3月27日、日本は国際連盟から脱退した。それから間もない4月4日に、稲造に昭和天皇裕仁陛下から、ご進講のお召しがあった。

帰宅後、その時の様子を食卓で話したが、“天皇陛下”とは言わず、“てんしさま”と言ったので、子どもや家族は、最初は“エンジェル(天使)”のことと勘違いし、話が良く理解出来なかったが、“天子様はお若いのにご立派な方だ。非常に国のことを憂いていらっしゃる。アメリカの対日感情もご心配されている。自分は天子様のために、及ばずながら、お尽くししたいと思う”と、目をつぶったまま話したので、皆は“ご進講のことだ”とようやく理解したという。(つづく)

孔雀溪

訳：一瀬靖子／大槻一枝

台湾の阿里山の麓に孔雀溪という小さな谷があります。なぜ孔雀溪と呼ばれるのでしょうか？ それにはこんな物語があります。

福建省鷲峰山の大森林に孔雀の巣がありました。孔雀のつがいが、3羽の雄と2羽の雌の幼鳥を育てていました。一番小さな女の子の名は翎翎。彼女は一番お転婆で、いつも遠いところまで一人で飛んで行きます。孔雀の母さんは、

「翎翎、一人でむやみに遠くへ行っちゃだめよ。帰って来られなくなったらどうするの？ 悪い人に連れて行かれるかもしれないのよ」

翎翎は小さな翼をパタパタとさせながら、

「私の翼は丈夫よ。道だってちゃんと覚えているし、帰って来られます。私の嘴は強いし、爪だって鋭いから悪者なんて怖くない。いつも鷲峰山でうずくまっていたは籠の中にいるみたい。もう飽きちゃった」

お母さんはため息をついて、

「おてんば娘ね。後で悔やんでも遅いのよ」と言うしかありません。

ある日の朝、翎翎は東の方に飛んで行きました。いくつかの山や町を越え、台湾海峡の上空にまで飛んできました。朝靄が赤く海を照らし、錦の絵ように輝いています。彼女は自分も錦の中に織り込まれたような気持ちになってしまいました。

「孔雀の羽は美しい。美しい羽を錦に織り込めば、錦はもっと美くなる」などと思いながら遠くまで飛びました。

「もうそろそろ鷲峰山へ帰らなくちゃ。父さんや母さんが心配するわ」と思った時、彼女はすでに方向を失って、台湾の方へ飛んでいました。「あれ!? ここには山もあり、川も流れて、町もある。でも鷲峰山の近くとは違うようだよ」彼女は疲れて山の大木にとまり、あたりを見回しました。

路上には人が歩いています。心配事でもあるようにしよげ込んだ中国人がいるかと思うと、鼻の高い、青い目をした得意満面の背の高い人などが歩いています。その頃、台湾はオランダの軍隊に占領されて、中国人は残酷にいじめられていたのですが、彼女はそれを知りませんでした。翎翎は「この鼻の高い、青い目をした人はきっと悪い人に違いない。早く帰らなくちゃ。父さんや母さんが心配する」そう思った矢先、突然、“パーン”と銃声が響き、弾は翎翎の翼に当たって、彼女は草むらに落ちてしまいました。鼻の高い、青い目の男性が翎翎を拾い上げて、そばにいた同じように鼻の高い青い目の女性に向かって、

「なんてきれいな孔雀だろう」

と言いました。女性は、

「持って帰りましょう。籠に入れて、けがが治ったら踊ったり歌ったりさせればいいわ」

山の中腹に大きな家がありました。翎翎はその家のバルコニーの鳥籠に入れられてしまったのです。彼女は籠の隅に伏せて泣きました。

「母さんの言うことを聞けばよかった。こんなことになってしまって！」

と、悔やんだのです。鼻が高く目の青い男女は、砕いた牛肉を籠に差し入れながら言いました。

「食べて元気になったら、私たちに歌を歌ったり、踊ったりして見せて」

しかし翎翎は隅にうずくまり、嘴を堅く閉じて食べようとしません。暫くすると、彼らは卵の黄身と干したむきエビを籠に入れました。女性は、

「きれいな孔雀さん、これを食べて元気になって。今晚は宴会があるので、そこで歌って踊って欲しいの。お客様を喜ばせたいのよ」

翎翎は客間で歌ったり踊ったりして見せなくてはならないと聞いて、なお固く嘴を閉ざし、首をかしげて、

「翎翎はひねくれ者だから、そんなことにはかかわりたくありません」と言いました。

これを聞いた二人は怒りだして、

「彼女の羽をすっかりむしってしまおう！」

と手を伸ばして小さい孔雀をつかみ出し、二人で翎翎の羽をむしり取りました。

翎翎は嘴を噛み締めて痛さをこらえました。

「食べないし、歌いません。どうにでもして！」

彼らは翎翎の羽をむしりとり、籠に戻しました。

「羽をなくした孔雀は鶏にも及ばない！」

彼らは捨て台詞を吐き、荒々しく立ち去りました。

翎翎は籠の中で気を失い倒れました。

翌日の朝、翎翎は樹の上のトラツグミの声で目を覚ましました。全身の羽はむしり取られ、寒く、痛い。彼女は空を見上げて涙を流し、悲しみ、痛みを訴えました。

「父さん、母さん、あなた方の娘は今、天の果て、地の果てで悲しんでいます。あなた方の言うことを聞かず、道に迷ってこんなところへ来てしまいました。籠に閉じ込められて、羽は全部抜き去られました。鳳凰も羽毛がなければ鶏にも及ばぬと言われます。私は鶏にも及ばない。寒いし、お腹もすくし、もうすぐ死んでしまいそうです。父さん、母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、どんなに私のことを心配しているでしょう。こんなことになってしまっただごめんなさい。みんな私が悪いのです」

翎翎の涙は流れ流れて籠から流れ出し、バルコニーを越えて地面を濡らし、小さな溪流となりました。後に人々はこの小さな溪流を孔雀溪と呼ぶようになったのです。

トラツグミは樹の上で翎翎が泣きながら訴えるのを聞き、飛んできて訊きました。

「君は何という動物なの？」

「私は小さい孔雀です。名を翎翎と言います」

「孔雀なのにどうして羽がないの？」

翎翎は泣きながらこうなった経過を話しました。トラツグミは同情して、

「翎翎、泣かないで。涙では君の命を救うことはで

きないよ。私が飛んで行って瑪祖婆様に救いを求めよう。君はちょっと休んでいなさい」

トラツグミは羽ばたいて飛んで行きました。

翎翎は、瑪祖婆が台湾高山族の人々に、最も信仰されている神様とは知りませんでした。瑪祖婆ってなに？ 私の体に羽を生やしてくれるの？ 金網の籠を壊して私を鷲峰山へ返してくれるの？ そんなことできるのかしら？ 私は死ぬよりほかないと思うけれど…。と思いながらまた気が遠くなっていきました。

トラツグミが帰って来ました。その足の爪には羽毛管をつかんでいます。籠の近くまで来ると、翎翎を呼び、

「瑪祖婆が君に仙人乳の入った羽毛管をくださった。君が仙人乳を飲むと羽毛が生えて来る。君が唾をかければ鉄の鳥籠は溶けるよ」

翎翎が仙人乳を飲むと、体がかゆくなり、震えが来たと思うと、全身に羽が生え始めました。以前よりさらに美しい羽毛です。満身に力が満ちて来ました。彼女は鉄の錠を外して逃げ出そうとしました。

その時、突然階段から足音が聞こえて来ました。あの二人がやって来たのです。

トラツグミは急ぎ孔雀を籠から連れ出し、空に飛び立ちました。トラツグミは、

「私の故郷は福建、そこには身内がいる。君と一緒に飛んで帰ろう」

鼻の高い、青い目の、あの二人は籠の戸が開いて、孔雀が飛び出したことを知り、錠を構えましたが間に合いません。飛びながらトラツグミが言いました。

「こっちは仙人乳を飲んだんだ。羽毛は矢のように強い。そちらが一発でも打てば、こちらも羽を一本取って二人の男女の目を射抜く！」

彼ら二人は目を射抜かれて、バルコニーから落ちてしまいました。

トラツグミは小さい孔雀を連れて台湾海峡を渡りました。翎翎一家は早くから福建省鷲峰山の上空を旋回して彼らを待っていました。

みんなの広場

「麻生サークル祭 2023」

わんりい参加行事報告

本年度のサークル祭は、今までより1日延長して、6月2日から4日までの3日間、川崎市麻生市民館で開かれました。麻生区のテーマは「芸術のまち麻生の風を体験しよう」です。サークル祭実行委員会は30を超えるサークルの集合体で、各サークルはテーマに恥じぬように活動の発表に力を入れていました。わんりいも以前から参加しており、今年も最終日の6月4日に、午前は初の取り組みである水墨画教室、午後はボイストレーニングを開催しました。以下にそれぞれの活動の様子を報告します。

<水墨画教室>

水墨画教室は、町田市役所で開催される「まちカフェ」での実績はありますが、このサークル祭では、今回が初めての取り組みです。講師は、「わんりい」の挿絵や漢訳俳句でお馴染みの“満柏”さんです。まちカフェでは、三畳くらいのスペースしかなく、一組4人で午前午後に分けて行っていますが、今回は視聴覚室という比較的広い部屋で、まちカフェの5～6倍の広さです。場所も町田市と違って新百合ヶ丘で行うため、果たしてどのくらいの参加希望者があるか、担当者は当初心配していました。しかし、開始時刻が近くなると少しずつ希望者が集まり始め、4人が座るようにしたテーブルを3か所に増やして、最終的に12人の方々を迎えることになり、メンバーは

胸をなでおろした次第です。まちカフェは毎年12月に開催されるため、翌年の干支の動物を描くのが通例でした。今回は、何をテーマにされるのかと聞いてみると、満先生は水墨画の定番である「四君子（蘭、竹、菊、梅）」の中から、夏のテーマ「竹」を選んで、筆の持ち方、葉と竹の節の描き方、墨の濃淡を使っての描き方、画面に粗密を付けること、葉の方向が一方に偏らないように、などを基礎から説明され、実際にお手本を描かれました。それから受講者の皆さんが先生のお手本をもとに思い思いに描き進めました。あっという間に12時となり終了。皆さんは充分満足されたようです。新百合ヶ丘にも水墨画教室を作りたい、と言った要望も頂きました。

<ボイストレーニング>

午前中の水墨画教室に引き続き、午後はボイストレーニング公開講座でした。担当者の“参加者が少なかったらどうしよう”という心配をよそに、次々に集まって頂き、最終的には30人近くの方が参加してくださいました。皆さん、コロナ禍で声を出す機会が減り、声が出難くなったという方が多く、Emme先生の“声帯も筋肉ですから鍛えれば声は出るようになります”という声掛けで始まり、簡単なストレッチの後、身体が楽器だと思って、横隔膜の両横の筋肉を意識して声を出す方法を習い、日頃出したことがないような高音、低音の声を出し、大声で笑い、顔も身体



お手本を描く先生の手許を見つめる



ボイストレーニングの前に自己紹介

もリラックスしたところで、皆で「夢で逢いましょう」を手話付きで歌いました。その後、童謡唱歌を次々と歌い、楽しい時間を過ごしました。

初めてボイストレーニングを体験した方が殆どでしたが、皆さん、表情も豊かに、“とても楽しい時間だった”との感想を頂きました。

サークル祭に、ボイストレーニングが徐々に定着して来たような手ごたえを感じています。

日本雲南聯誼協会本部を訪問

わんりいは「まちカフェ」や「夢広場」などで、ラオスのモン族の手作り小物に加え、会員の佐藤紀子さん(中国名=張怡申)が宮沢賢治の物語や文字を図案化して製作したトートバッグを販売しています。佐藤さんはNPO法人・日本雲南聯誼協会(以下、聯誼協会)の趣旨と活動に感銘を受け、トートバッグの販売による売り上げを寄付に充てることを計画されていました。

当初、佐藤さんと寺西代表が寄付金とトートバッグを持参して協会本部を訪問する予定でしたが、佐藤さんの体調が優れなかったため、6月20日(火)に予定されていた初鹿野恵蘭理事長との面会は、急遽、代表とともに事務局の吉光が同行することになりました。

何年か振り(コロナのせいで)の協会本部訪問でしたが、初鹿野理事長さんに急用が発生し、残念ながら、面会は叶いませんでした。そこで、本部勤務のお二人に寄付金とトートバッグを託すとともに、聯誼協会の活動について、色々なお話を伺い、交流を深め



聯誼協会の事務スタッフのお二人

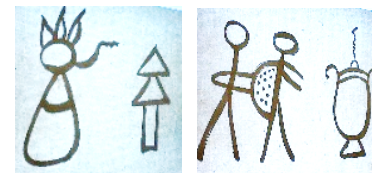
ることができました。(写真参照)

聯誼協会の活動の柱の一つは雲南省内各地に日中友好の小学校を造る活動であり、現在まで25校を開設し、多くの子供に勉学の場を提供して来ました。

もう一つの特色ある活動は「25の小さな夢基金」と呼ばれるものです。これは貧困により進学が困難な雲南省少数民族居住地の女子を支援する活動で、雲南省内から選ばれて全寮制高校である「昆明市女子中学」で学ぶ少女たちと里親サポーターを結び付け、高校生ひとり一人の卒業までの3年間を物心両面から支援するものです。この支援プログラムは2006年にスタートし、今日まで千名近い卒業生を送り出し、卒業生は多方面で活躍しています。

昨年は日中国交正常化50周年認定事業、日本雲南聯誼協会22周年記念事業として、「雲南の風が吹く！少数民族文化を楽しむ9日間」と銘打って7/20～7/28の期間で「中国雲南フェスティバル in 東京」を港区虎ノ門の中国文化センターを会場として開催しました。「少数民族ファッションショー」「雲南クイズ大会」「民族衣装を着て記念撮影」「トンパ文字講座」「茶芸講座」など、盛り沢山の内容でした。

わんりいも予めから、聯誼協会の活動に賛同し協力を行ってきました。「25の小さな夢基金」で支援を受けている女生



トンパ文字の例

徒から、年に2～3回のお礼や近況を綴った手紙が大量に送られて来ますが、そのかなりの数の手紙をわんりいの有志20名ほどの翻訳チームが日本語に翻訳し、同協会を通じて里親サポーターにお届けしてきました。ここ数年間、それが無くなっていたのですが、コロナによる郵便事情のため、手紙の到着が途絶えていたというお話でした。今後、手紙が到着するようになれば、わんりいの協力も復活させたい、とお伝えしました。

協会本部の事務担当のベテラン、黒沼さんから、「佐藤さんには、くれぐれもよろしくお伝えください。素敵なトートバッグですね。理事長もきっと喜ぶでしょう」とのお言葉をいただいて、協会本部を辞しました。

雲仙岳温泉郷

6月号では、雲仙普賢岳の噴火遺構や新しく出来た平成新山の写真で、雲仙岳の激しい一面をご紹介しましたが、今回は、雲仙岳の「静」の一面を見て頂きましょう。



雲仙温泉郷

山間の静かな温泉郷には、日本全国から人々が癒しを求めて集まって来ます。こんな静かな佇まいの中にも自然の力は蓄えられているのです。



ヒカゲツツジ

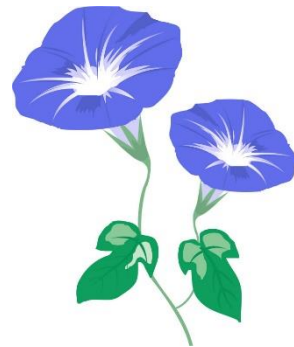
岩の間に根を張って、たくましく成長し、美しい花を咲かせるヒカゲツツジです。こんなところで植物が生き延びるのもまた、自然の力の賜物です。昔の人々が自然を神と崇め、敬意を持って接したことが理解できますね。



河津七滝 初景滝

7月は、小暑、大暑と暑さの厳しい時期が続きます。身体にまとわりつく熱気は如何ともしがたいものですが、せめて、想像の世界で、涼しげなところに身を置いてみてください。

そんな時の一助となればと、これも佐々木さんのアルバムから、河津七滝の一つ初景滝の写真を頂き、ご紹介します。



◇満柏画伯の漢訳俳句◇

夕立や

草葉をつかむ むら雀

与謝蕪村

huáng hūn yǔ jí lái wú zōng
黄昏雨急来无踪

qún què luàn fēi cǎo yè jiān
群雀乱飞草叶间

【わんりいの催し】
皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：7月18日（火）10：00～11：30
8月29日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

\*\*\* 中国語で読む 漢詩の会 \*\*\*

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：7月30日（日）10：00～11：30  
8月は休講
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp  
(有為楠)



■7月・8月定例会 代表宅

- ▼7月13日（木）13：45～
- ▼8月11日（金）13：45～

■‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼8月号 休 刊
- ▼9月号 未 定

☆☆ 編集後記 ☆☆

今年の夏至は6月21日でした。ご存知の通り、夏至は昼間が一番長い日ですから、これからは、日一日と日が短くなります。12月21日又は22日には冬至になり、夕方4時を過ぎるともう暗くなって、夜が一番長い日になります。毎日の日の出、日の入りの時刻の変化はごく僅かですが、一年という時間をかけて、毎年着実な変化を繰り返す自然は凄いですね。

6月25日に沖縄地方で梅雨明け宣言がありました。例年だと、これから九州四国本州が本格的な梅雨に入り、7月10日頃梅雨明けとなりますが、今年はどうなるでしょう。6月末から、局所的豪雨だとか線状降水帯だとかが各地で発生しています。梅雨は、やはり、しとしとと静かに降る雨が似合うと思うのですが。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します
年会費：1800円、入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい
10月以降の入会は、当年度会費1000円
■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’ 285号の主な目次

寺子屋 四字成語(64)『不毛之地』……………	2
「日译诗词」(34) 岑参の辺塞詩……………	3
「中原雑感」(33)「朱仙鎮木版年画」……………	4
中國の神話・伝奇物語 (24) 虬髯客伝 (2) ……	6
「避暑山莊・外八廟」 駆け足旅行 (4)……………	9
「新渡戸稲造と台湾」(2)……………	11
「孔雀溪」……………	13
みんなの広場……………	15
‘わんりい’の催し・お知らせ……………	18